

平 尾 遺 跡

—府立美原高等学校下水道放流切替工事に伴う調査—

大阪府教育委員会

平 尾 遺 跡

—府立美原高等学校下水道放流切替工事に伴う調査—

大阪府教育委員会

序 文

大阪府堺市美原区平尾に所在する平尾遺跡は、昭和48年（1973）に府立美原高等学校建設に先立って実施した試掘調査によって発見された遺跡です。これに基づき同年9月から翌年にかけて、1万4千m²を越える発掘調査を実施しましたところ、7世紀から8世紀にかけた建物群が多く発見されました。この考古学的成果は当時の古代史研究者間で、官衙跡なのかそれとも地方豪族の邸宅跡か、という論争を巻き起こしたことで有名な遺跡となりました。

このたび府立美原高等学校下水道放流切替工事に伴い、この平尾遺跡の発掘調査を実施しました。その結果、古代の遺構面と遺物を確認し、またかつての発掘調査を再検討する材料を得ることができました。このことによって平尾遺跡のより具体的な様相が明らかになりました。これは地域の歴史を探る上で、貴重な資料となりましょう。

発掘調査期間中は、府立美原高等学校をはじめ地元の関係各位、諸機関のご協力を得たことに感謝の意を表するとともに、今後とも文化財保護行政にご理解とご協力を賜りますようお願いします。

平成24年3月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長 野口 雅昭

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会施設財務課から依頼を受け、文化財保護課が実施した府立美原高等学校下水道放流切替工事に伴う平尾遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、文化財保護課主査辻本武を担当者として、平成23年7月に着手し、同年10月に現地調査を終えて引き続き整理作業を行ない、平成24年3月本書の刊行をもって終了した。調査番号は11027である。
3. 本書で用いた標高は東京湾平均海面（T.P.+値）であり、座標値は世界測地系である。
4. 発掘調査の際に使用した基準点は、（株）八州に委託して設置した。
5. 発掘調査および整理作業に際しては、大阪府教育委員会施設財務課、府立美原高等学校はじめとする諸機関、諸氏、地元各位よりご協力を賜った
6. 本書の執筆・編集は、辻本が担当した。
7. 本書は300部作成し、一部あたりの単価は461円である。

目　　次

第1章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
3. 平尾遺跡における既往の調査	4

第2章 調査の成果

1. 調査に至る経過と方法	7
2. 校内西側の調査（会所記号：M～P～最終2）	7
3. 校内東側の調査（会所記号：A～L～最終1）	9
4. まとめ	12

第3章 1973・74年度の調査

1. 調査の方法	14
2. 検出遺構	16
3. 出土遺物	20

第4章 まとめ

図版

報告書抄録

第1章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

堺市美原区平尾に所在する平尾遺跡は、大阪の南東部に広がる羽曳野丘陵の一角にあり、狹山池から流れる東除川と西除川に挟まれた段丘のうちでも東端に位置する。東除川が丘陵を下刻した河岸段丘の上にあるとも言える場所である。遺跡の標高はT.P.+50mほどで、東除川とは10m以上の比高差があり、遺跡からはこの東除川を望むことができる。この段丘では古代から開析谷を堰き止めた溜池の築造が盛んに行われて、土地利用が大いに進んできた所である。また遺跡内や周辺を通ると考えられている竹ノ内街道や茅淳道は難波宮・和泉と大和とを結ぶ交通路で、この遺跡が古代より交通の要所にあったことを示すものである。

平尾遺跡はこのような地理的環境の中に立地している。

2. 歴史的環境

平尾遺跡（1）の周辺における遺跡については、図1の遺跡分布図および表1の周辺遺跡一覧表に示した。

平尾遺跡周辺では、旧石器時代から縄文・弥生時代にかけての遺跡としては清堂遺跡（5）などいくつかが挙げられているが、いずれも明確な遺構に伴うものがほとんどない状態である。当該期の遺物の出土によって、何らかの生活痕跡を示しているに過ぎない。従って当遺跡周辺は、弥生時代までは人間の活動が希薄な地域であったと言えよう。

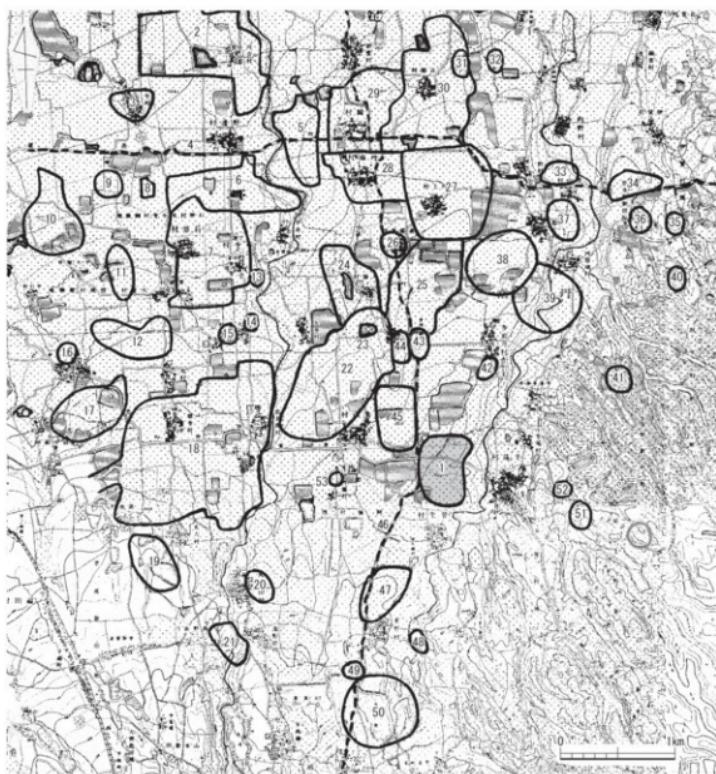
古墳時代中期になってようやく当地域の歴史的重要性が現れ、当遺跡から北北西に1.3km離れた場所に黒姫山古墳（23）が築造されるのである。この古墳は東西を主軸とする全長114mの前方後円墳で、周濠を有する。昭和22年から24年にかけて調査された。その結果、埴丘は二段築成で、葺石と埴輪列を伴い、前方部に石室が確認された。石室からは、短甲や冑、鎧、草摺、刀、剣などの鉄製品が多く出土した。またこの古墳の周辺では、地名等から陪塚が少なくとも六基あると思われていたところ、周辺の遺跡発掘調査で小規模の方墳や帆立貝式古墳が発見されており、今は削平されて表面上に痕跡を有さない多数の古墳群の存在を考えることができる。黒姫山古墳および周辺の小古墳群は、当地域にかなりの勢力を有する首長の出現を意味するものであろう。

また当平尾遺跡の東に2km離れた余部日置莊遺跡（18）や日置莊西町遺跡（17）では埴輪の窯跡が見つかっており、当地域が埴輪の生産地であったことが判明した。

7世紀に入ると、当地域の発展は狹山池によるところが大きいと思われる。狹山池は6世紀末には築造されたと考えられ、西除・東除の両河川に挟まれた地域やその周辺で耕地の拡大や集落の増加につながった。従って当地域は7世紀から本格的な開発が始まったと言えるであろう。

また当平尾遺跡周辺は、「日本書紀」に記載のある茅淳道や丹比道が走る場所である。これら

は難波津と大和を結ぶ重要な官道で、特に茅渟道は当遺跡内を通る説が有力である。この官道の記述は大化5年（649年）条なので、7世紀半ばまでは整備されたものであろう。この地域が交通の要所にあったことも、地域発展の大きな要因となったことであろう。



1. 平尾遺跡
2. 河合遺跡
3. 中村町遺跡
4. 竹ノ内街道
5. 清堂遺跡
6. 八下遺跡
7. 小寺遺跡
8. 石原町2丁遺跡
9. 石原町北遺跡
10. 金剛遺跡
11. 石原町遺跡
12. 日置莊北町遺跡
13. 長和寺跡
14. 八坂神社遺跡
15. 城岸寺城跡
16. 初芝遺跡
17. 日置莊西町遺跡
18. 余部日置莊遺跡
19. 丈六大池遺跡
20. 北野田遺跡
21. 野田遺跡
22. 太井遺跡
23. 黒姫山古墳
24. 大保遺跡
25. 真福寺遺跡
26. 真福寺跡
27. 丹上遺跡
28. 丹南遺跡
29. 岡遺跡
30. 立部遺跡
31. 立部古墳群
32. 阿弥陀庵寺
33. 標山遺跡
34. 伊賀南遺跡
35. 車地遺跡
36. 平下遺跡
37. 郡戸東遺跡
38. 郡戸遺跡
39. 河原城遺跡
40. 石曳遺跡
41. 六ヶ塚河原城古墳
42. 丹比庵寺跡
43. 丹比神社
44. 黒山庵寺
45. 黒山遺跡
46. 中高野街道
47. 東野中遺跡
48. 東野遺跡
49. 東野庵寺跡
50. 大鳥池遺跡
51. 平尾塚跡
52. 平尾城跡
53. 阿弥陀寺經塚

第1図 周辺の遺跡分布図

表1 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期						種類	備考		
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世		
1	平尾遺跡					○				集落跡・散布地	掘立柱建物群、官衙跡か
2	河合遺跡			○	○	○	○	○	○	集落跡	
3	中村町遺跡							○		散布地	
4	竹ノ内街道								○	街道	
5	清堂遺跡	○	○	○	○	○	○			集落跡	
6	八下遺跡							○		集落跡	
7	小寺遺跡							○		集落跡	掘立柱建物等
8	石原町2丁遺跡				○					集落跡	
9	石原町北遺跡							○		集落跡	
10	金岡遺跡					○				集落跡	
11	石原町遺跡	○			○			○		集落跡・城館跡・生産遺跡	
12	日置莊北町遺跡					○				散布地	
13	長和寺跡						○			社寺跡	有銘五輪塔
14	八坂神社遺跡						○			社寺跡	軒丸・軒平瓦
15	城岸寺城跡							○		社寺跡	石溝遺構等
16	初芝遺跡				○					散布地	
17	日置莊西町遺跡			○				○	○	集落跡	
18	余部日置莊遺跡				○	○	○	○		集落跡・生産遺跡	掘立柱建物、磐礎型
19	丈六大池遺跡				○			○		集落跡・生産遺跡	
20	北野田遺跡				○	○		○		集落跡	
21	野田城跡							○		城館跡	
22	太井遺跡					○	○	○	○	集落跡・生産遺跡	鋳造遺構、掘立柱建物
23	黒姫山古墳				○					古墳	国指定史跡、前方後円墳
24	大保遺跡					○	○	○		集落跡	掘立柱建物等
25	真福寺遺跡					○	○	○	○	集落跡・生産遺跡	梵鐘鋳造遺構、瓦窯
26	真福寺跡							○		社寺跡	
27	丹上遺跡					○	○	○		散布地	掘立柱建物、和鏡
28	丹南遺跡		○	○	○	○	○	○	○	集落跡・城館跡	丹南藩陣屋
29	岡遺跡	○	○	○	○	○	○	○		集落跡・社寺跡・古墳・生産遺跡	鋳造遺構
30	立部遺跡				○	○	○	○	○	集落跡・社寺跡・古墳・墓・生産遺跡	鋳造遺構、火葬墓
31	立部古墳群					○				古墳	円墳・方墳
32	阿弥陀庵寺							○	○	社寺跡	溝・井戸等
33	稲山遺跡	○				○	○	○	○	集落跡	初期須恵器・古墳跡
34	伊賀南遺跡					○	○	○	○	集落跡	掘立柱建物
35	車地遺跡					○	○			集落跡	掘立柱建物群、区画溝
36	平下遺跡						○			集落跡	
37	郡戸東遺跡							○		集落跡	井戸・柱穴等
38	郡戸遺跡									散布地	土師器等
39	河原城遺跡					○	○	○	○	集落跡	
40	石曳遺跡	○	○	○	○	○	○	○		集落跡	火葬墓、掘立柱建物
41	六ヶ原河原城古墳								○	古墳	円墳群、埴輪、石棺
42	丹比廢寺跡						○			社寺跡	府指定史跡、塔跡、軒平瓦
43	丹比神社						○	○		社寺跡	軒丸瓦
44	黒山廢寺						○	○	○	社寺跡	軒丸・軒平瓦、頭尾、埴
45	黒山遺跡						○	○	○	散布地	須恵器等
46	中高野街道							○	○	街道	
47	東野中遺跡					○	○	○	○	集落跡	
48	東野遺跡								○	集落跡	
49	東野廢寺跡							○	○	社寺跡	
50	大鳥池遺跡			○						散布地	
51	平尾城跡									城館跡	
52	平尾窯址							○		生産遺跡	
53	阿弥陀寺經塚								○	経塚	

当平尾遺跡は7世紀半ばから8世紀第一四半期の時期に、100棟もの掘立柱建物群の存在が確認された大規模な集落遺跡である。柵と溝に取り囲まれた掘立柱建物群が整然と配置される様相が見られるところから、郡衙のような官衙跡か、あるいは当時この地域を本拠地としていた丹比連の拠点集落を考えることができるところである。

また当平尾遺跡周辺地域では、丹比庵寺（42）や丹比神社（43）、黒山庵寺（44）、東野庵寺（49）などの古代社寺が展開しており、古代瓦の出土が報告されている。このうち丹比庵寺には塔心礎が遺存している。これらの古代寺院は、この地域に勢力を有していたとされる丹比連や丹比公、菅生氏などの古代有力氏族に関係する社寺であると考えられる。

そして当平尾遺跡から北西1.0kmにある太井遺跡（22）は、8世紀初頭の掘立柱建物群とともに銅鑄造関連遺構が検出された。これは『統日本紀』和銅2年（709年）条にある河内鉄銭司と関係があると思われる。太井遺跡の北東に隣接する真福寺遺跡（25）では、鋳造に必要な白炭を作る窯が見つかっており、この一帯が奈良時代の大規模な青銅製品生産地であったと言えよう。

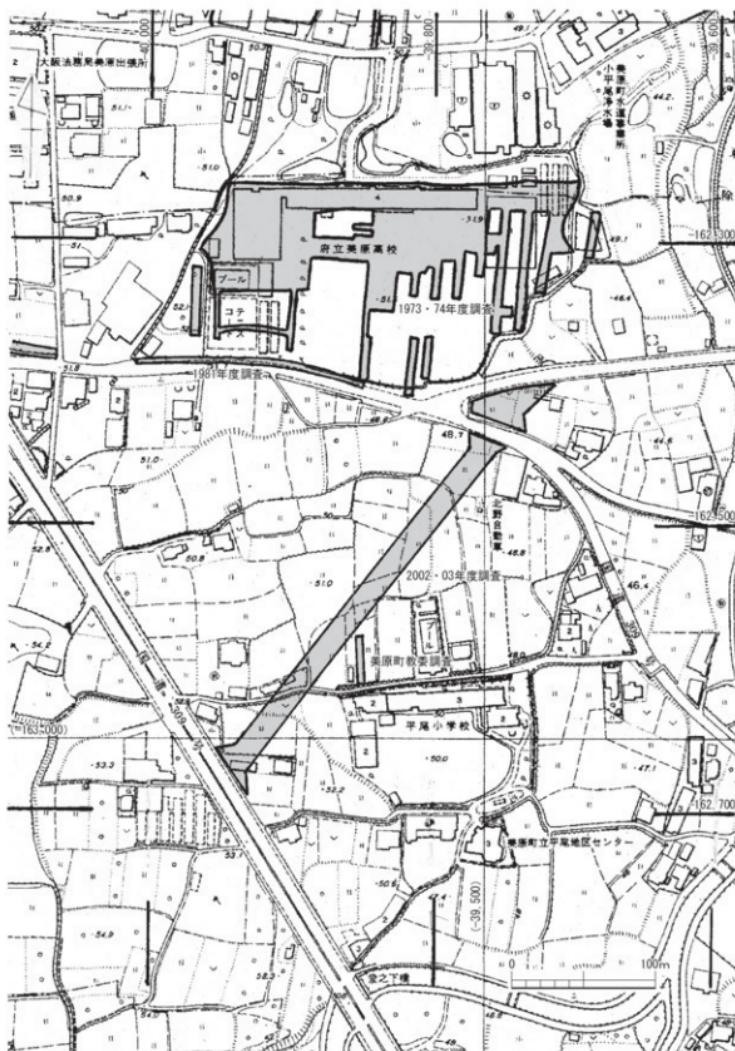
中世になると、真福寺遺跡を始めとして岡遺跡（29）、立部遺跡（30）等々で鋳造に関連する遺構・遺物が多く検出されている。これは文献や梵鐘などの金石文で記録されている河内鉄物師の本拠地であったことを示すものであろう。河内の鉄物師は中世前期に全国的に活躍し、各地に移住して梵鐘等を製作したとされる。今なお各地に遺存する中世鉄物製品には、河内鉄物師が関わったことを示す銘文が残されているものが多い。しかしこのような鉄物師の活躍は、活動拠点地であった当地域で中世後半以降になって影が薄くなって鉄物産業として成立することなく、そして現在では遺跡としてその痕跡を残すのみとなった。

3. 平尾遺跡における既往の調査

・府立美原高等学校建設に伴う調査

南河内郡美原町（現在の堺市美原区）では1972年（昭和47）に高校誘致の声が高まり、大阪府教育委員会は同町平尾の地内に高校建設用地を定め、建設事業に取りかかった。そして同府教育委員会は翌1973年に高校建設に先立つ事前踏査したところ、予定地一帯に須恵器・土師器の破片が散布し、また用地の一部に「金堂山」と呼ばれる塚が残されていることを確認した。そこでこの地が遺跡である可能性があるとして、同年6月に試掘調査を実施したところ、古代の遺物とともに掘立柱建物跡が多数検出されたところから、ここを「平尾遺跡」と名付けて周知の遺跡とした。

同年9月より学校用地の東半分の発掘調査が始まり、その結果、整然と配置される44棟以上の掘立柱建物群と柵列、区画溝が検出された。さらに翌1974年4月より用地西半分の発掘調査が実施され、6棟の倉庫を含む18棟以上の掘立柱建物が検出された。高校用地3万6千m²のうち発掘調査したのは1万4千m²であるが、以上の調査によって用地全体にわたって7～8世紀の建物群



第2図 平尾遺跡の既往の調査（括弧内数字は日本測地系）

が密集する状況が判明した。

そして調査が終了後の1975年に、古代を考える会が平尾遺跡の検討会を開催し、調査担当者や古代史研究者らによる討論会が開かれ、その成果は翌76年に発行された『古代を考える2 平尾遺跡の検討－推定河内国丹比郡郡衙遺跡－』として発表された。

・府道堺富田林線歩道設置工事に伴う調査

府立美原高等学校の南を東西に走る府道堺富田林線で歩道設置工事が計画され、それに伴う発掘調査が1981年（昭和56）8月より実施された。この際に、高校西側において倉庫建設に伴う調査も同時に実施された。発掘調査面積は1,200m²である。以上の調査結果、平尾遺跡の集落跡の南辺を画すると考えられる東西溝と、西辺を画すると考えられる南北溝を検出したとされた。この調査成果は『平尾遺跡発掘調査概要』（1982年 大阪府教育委員会）として公刊された。

・主要地方道堺富田林線船渡バイパス建設に伴う調査

平尾遺跡南半部において、国道309号線から北東に向けてバイパス道路の建設が予定され、それに先立つ発掘調査が2002年（平成14）および翌03年（平成15）度に実施された。発掘調査面積は5,900m²である。

飛鳥～奈良時代の掘立柱建物37棟以上と、刎り抜き船材を転用した井戸、そして枠組の井戸などを検出した。井戸枠は年輪年代法により奈良時代前期の伐採年と判明した。この調査によって、平尾遺跡は南に大きく広がることが判明した。また注目すべきものとして鋳型や轆羽口などの鋳造関連の遺物が出土した。当遺跡周辺は鋳造工人が活躍する地域であったが、この資料はその草創期のものとなろう。

以上の調査成果は『平尾遺跡』（2007年 大阪府教育委員会）として公刊された。

・水路建設に伴う調査

上述の2002・03年度調査と同時期に、その調査区の南側で水路建設が予定され、美原町教育委員会が発掘調査を行なった。調査は南北方向のトレンチを設定して行ない、掘立柱建物や溝、土坑が検出された。その成果は上述の『平尾遺跡』（2007年 大阪府教育委員会）に関連資料として紹介されている。

第2章 調査の成果

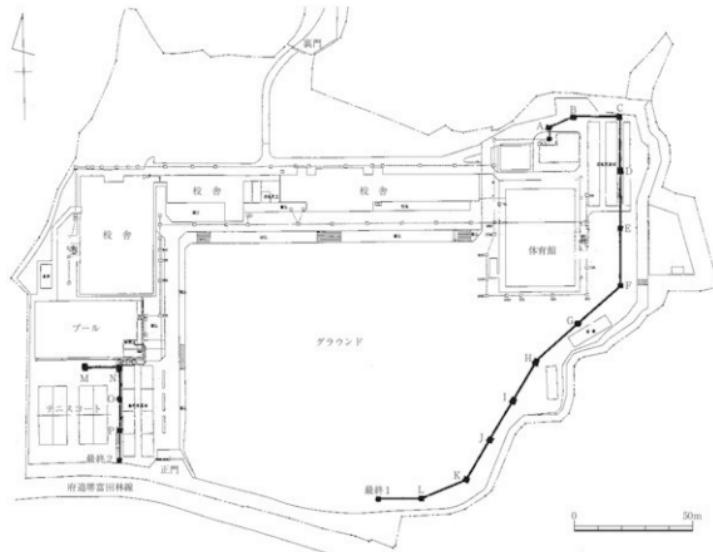
1. 調査に至る経過と方法

大阪府教育委員会は、堺市美原区における下水道事業の進展に伴い府立美原高等学校内の下水道の放流切替工事を計画した。当教育委員会文化財保護課はここが平尾遺跡という周知の遺跡の範囲内にあるため、計画した施設財務課と協議を重ねた結果、下水道工事と並行して遺跡発掘調査を行なうこととした。

調査は2011年7月より、校内西側のプール関係下水管の敷設工事（会所記号：M～P～最終2）に先立って、遺物包含層および遺構面を調査した。引き続き翌8月より校内東側の汚水関係の下水管敷設工事（会所記号：A～L～最終1）に先立って、同様の発掘調査を行なった。なおこのうち会所記号C～Lの部分は、下水道工事の床付け掘削レベルが遺物包含層および遺構面のレベルに到達せず、従って遺跡破壊はないと判断されたので、発掘調査は行なわなかった。

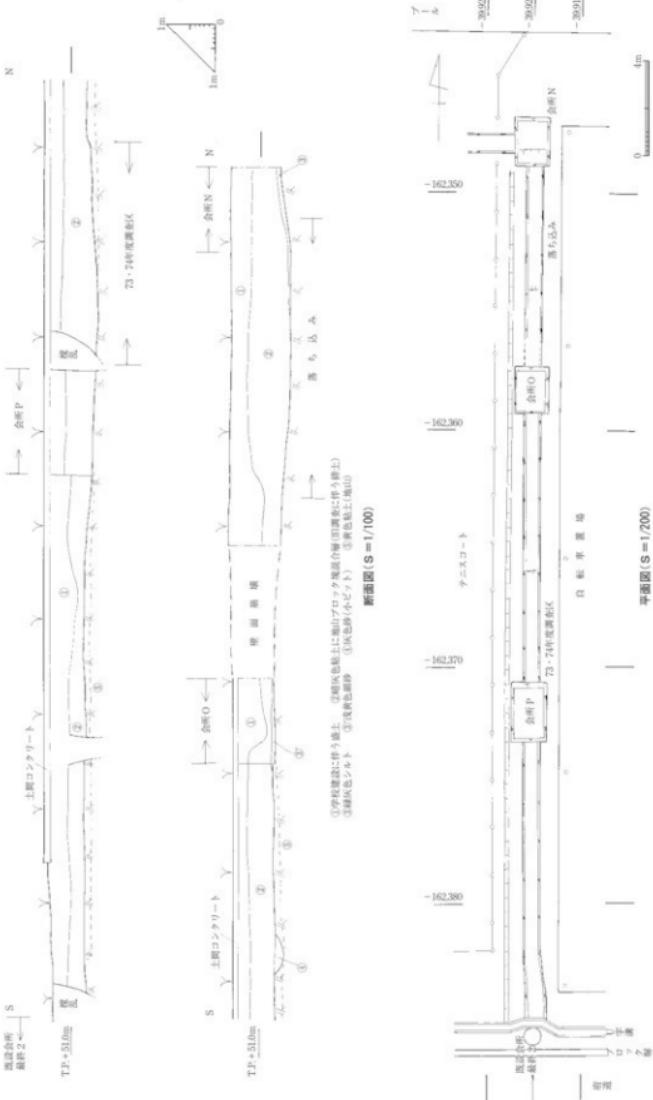
2. 校内西側の調査（会所記号：M～P～最終2）

発掘調査は、東西方向に16mにわたって予定された会所と下水管（M～N）、そして南北方向に38mにわたって予定された会所と下水管（N～最終2）の設置に先立って実施した。会所部分



第3図 美原高校内 調査区位置図

第4図 校内西側(最終2~N)の調査 断面図と平面図



で1.3×1.8m、下水管部分は幅0.6m程の狭小な調査区である。

基本層序

基本層序はN～最終2では、①土間コンクリートとそれに伴う路盤・盛土（厚さ0.3～0.5m）、②暗灰色粘土に地山ブロック小塊が混合する土層（厚さ0.4～0.6m）、③緑灰色シルト（厚さ0.1m）と④浅黄色砂層、⑤灰色砂、⑥黄色粘土（地山）となる。

②は耕作土と地山構成土等が混合された土層で、73・74年度の発掘調査の排土と思われる。③と④は狭い範囲に分布し、遺物は全く含まず、時期的にかなり新しい可能性がある。⑤の地山面のレベルは、T.P.+50.6～50.7mである。

M～Nでは、①テニスコートに造成に伴う盛土（厚さ0.3～0.5m）、および②暗灰色粘土と灰白色粘質土のブロック土（厚さ0.4～0.6m）、③緑灰色シルト（厚さ0.15m）、以上を除去すると④黄色粘土の地山面となる。基本的にN～最終2の調査区と同様の土層である。⑤の地山面のレベルはT.P.+50.6mを測る。

遺構

会所Pおよびその北5mの範囲で、地山面が周囲より0.1m下がっていることが観察された。これは73・74年度調査時のトレーナーの痕跡であると思われる。また会所O～Nにおいて約5.5m範囲で0.2m下がる浅い落ち込みも観察された。これは73・74年度調査で検出された落ち込みの続きと思われるが、時期的にはかなり新しいものである。以上によって、当時の調査箇所の正確な位置を知る手掛かりを得ることができた。

また一部の断面では、南北0.8m、深さ0.1mの小ビットが観察された。埋土は④灰色砂で、遺物はなかった。時期的に新しいものであろう。

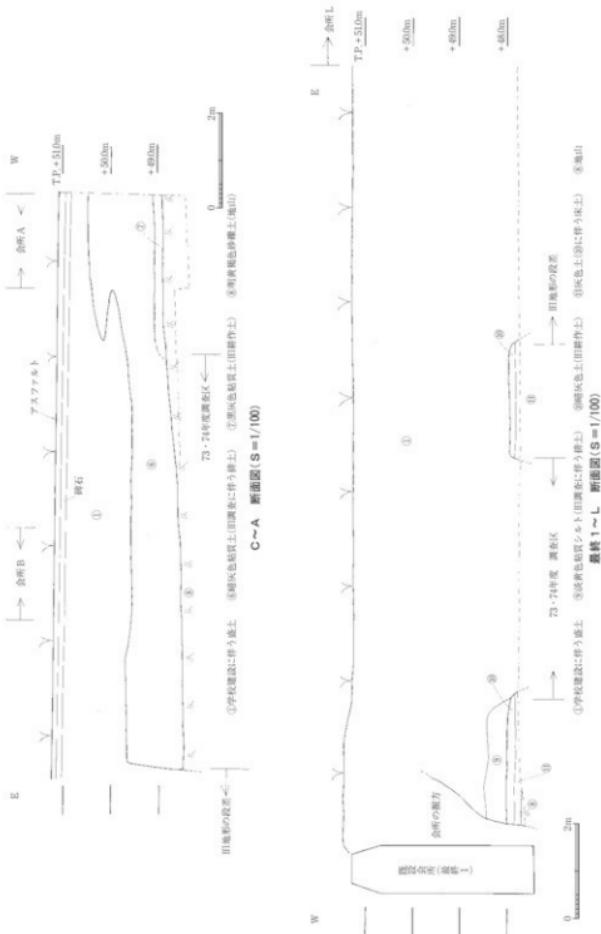
なおこの調査区では古代に属する遺構は検出されなかった。また須恵器片が出土したが、図化できるものではなかった。

3. 校内東側の調査（会所記号：A～L～最終1）

調査は、高等学校内の東端に沿って約230mにわたって予定された会所および下水管の設置に先立って実施した。しかしこの場所は、遺構面が現地表面より2.5～4.0m以上の深さにある。会所と下水管工事の床付け掘削は2.5～3.7mであり、C～Lにおいてはこの工事によって地下の遺構が破壊されずに保護されることが判明した。よってこの部分は調査の対象から除外し、遺構が破壊される部分であるA～CおよびL～最終1の二か所を調査の対象とした。

基本層序

会所A～Cでは、①アスファルトと路盤・盛土（厚さ0.6～1.5m）、②暗灰色粘質土（厚さ1.0～1.4m）、③黒灰色粘質土（厚さ0.2m）、④明黄褐色砂礫土（地山）である。このうち⑦は高校建築直前の耕作土層で、会所A付近で観察され、それより東側で途切れていた。⑧は73・74年度



第5図 校内東側 (C~A、最終1~L) の調査 断面図

の発掘調査の際に生じた排土で、会所A付近で厚さ1.4mを測り、他よりかなり分厚くなる。地山のレベルは会所Bの東側でT.P.+49.6m、会所AでT.P.+49.8mを測る。

L～最終1では、①運動場造成に伴う盛土（厚さ3.0～3.5m以上）、⑨淡黄色粘質シルト（厚さ0.5m）、⑩暗灰色土（厚さ0.15m）、⑪灰色土（厚さ0.15m）で、以上を除去すると⑧地山となる。

⑫は高校建築直前の耕作土層で、⑬はそれに伴う床土である。⑭⑮は既設会所最終1より東11mまでの範囲で観察され、そのうち中途の5m分が途切れていた。⑯は73・74年度の発掘調査の際に生じた排土で、会所最終1より東3mまでの範囲に堆積しているものである。地山面は会所最終1付近で確認され、レベルはT.P.+47.8mを測る。

遺構

会所Aでは地山直上に旧耕作土層が観察され、そしてその上には73・74年の発掘調査の際に生じた排土がうず高く堆積していた。当時の発掘調査の記録写真的うちでこの付近を撮影したもの（図版三）をみれば、調査トレチの間に排土が盛られている。盛られた部分は発掘調査されなかった箇所に相当するのであるから、旧耕作土はそのまま残存することになる。従って会所記号A付近が当時の調査トレチの間の未調査部分であり、そしてAより東で旧耕作土層が途切れる箇所が調査トレチ部分であることが判明した。なお第7図ではこのトレチが表現されていないが、これは当初のトレチの調査の結果、この付近では遺構が希薄なためにその後の全面調査の対象から除外されたという経緯があった。第7図はその後の全面調査の範囲を表している。



第6図 旧地形と調査区の位置

また会所Bより東3mで、かつての発掘調査の排土層が途切れ、しかもその地点で地山面も急に落ち込むことが観察された。これはこの箇所が旧地形の段差を示していて、かつての発掘調査の排土はこの段差に落とされたものと推定できるものである。

次に会所最終1より3m東までの範囲で旧耕作土層が残っており、それよりさらに東5mまでは旧耕作土層が途切れ、さらにその東では旧耕作土層が再び現れることを観察した。73・74年度の発掘調査記録では、トレンチは幅5mで設定されているので、旧耕作土層が途切れる部分が当時の発掘調査トレンチと判明した。

以上によって、当時の発掘調査箇所を正確に知る手掛かりを得ることができた。

なお、この調査区では古代に属する遺構は検出されず、また遺物の出土もなかった。

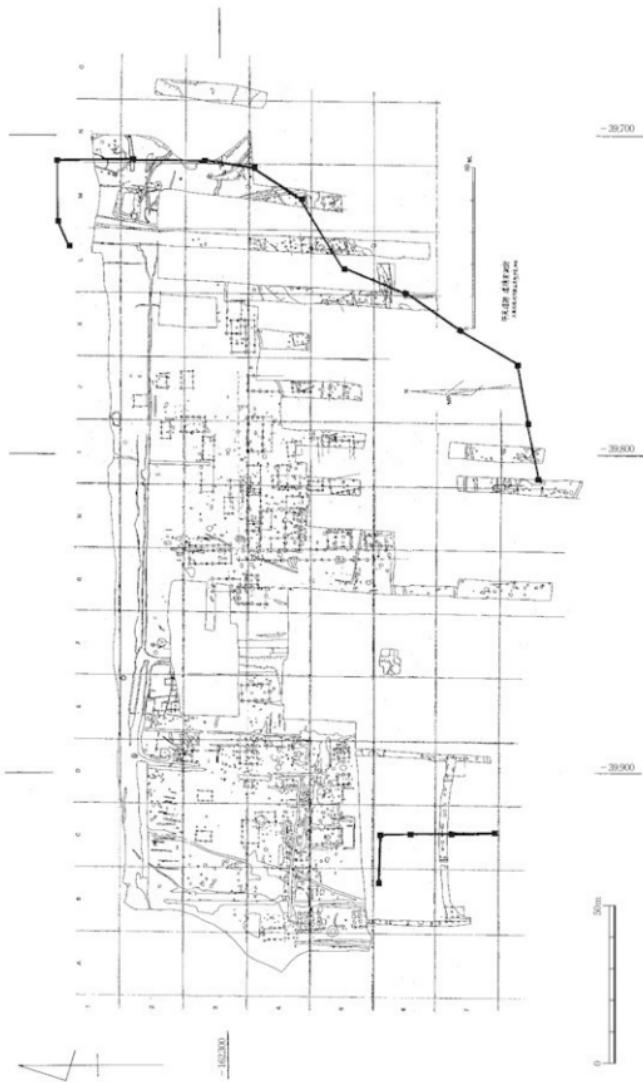
4.まとめ

平尾遺跡は7世紀から8世紀にかけての遺跡であるが、今回の調査ではこの時期の遺構は検出されなかつた。また遺物も須恵器片がわずかに出土したのみであった。しかし1973・74年度に実施された発掘調査の調査区の痕跡が見つかるという成果を得ることができた。

73・74年度の発掘調査は1万4千m²という、当時としては極めて稀な程の広大な面積を対象としたのであるが、検出遺構についてはほとんど手作業による測量で記録されており、国土座標等々は全く考慮されない時代であった。従って貴重な遺構群が検出されたにもかかわらず、その正確な位置は明確とはいえないかった。今回の調査は、この当時の発掘調査区の痕跡を発見したことによって調査区の正確な位置を把握することができ、さらに当時検出された遺構の位置を国土座標で表すことが可能となつたのである。

本書では当時の遺構実測図である第7図に、今回の成果である国土座標値を書き入れた。

第7図 平尾遺跡 73・74年度調査 遺構全体図（黒塗りが今年度調査区）



第3章 1973・74年度の調査

平尾遺跡は第1章にあるように、府立美原高等学校建設に伴って実施された1973年の試掘調査によって発見され、1973・74年度に本格的な発掘調査が行われた。その結果、7・8世紀に属する多くの掘立柱建物群が検出された。そこには溝や柵列に囲まれた主屋・副屋や倉庫群が配置される様相が見られたことから、官衙跡かそれとも豪族邸宅跡かの議論が巻き起こった。

この時の発掘調査の成果の一部は、古代を考える会が発行する『古代を考える2 平尾遺跡の検討－推定河内国丹比郡都衙遺跡－』(1976年1月)で公表されている(以下「文献①」とする)。調査の成果については担当者が口頭で報告したものを見字化しているので、従って発掘調査の報告としてはまとまっていると言いたい。

他に報告されたものとしては、平成11年9月の『美原町史第1巻』(以下「文献②」とする)に平尾遺跡が簡単に触れられている。しかしそれは文献①に基づく記述である。

また1977年12月に府立美原高等学校が発行した『美原の歩み 500日』という冊子(以下「文献③」とする)のなかに、平尾遺跡発掘調査の概要について簡単に触れられており、その内容については当時の学校側が得た情報に基づいている。

平尾遺跡では2002・03年度に、美原高等学校より南側でバイパス工事に伴う調査を実施され、その遺物整理作業の過程で、1973・74年度調査で出土した遺物整理も合わせて行なわれた。その成果は大阪府教育委員会『大阪府埋蔵文化財調査報告2006-3 平尾遺跡』(2007年4月)に報告されている(以下「文献④」とする)。

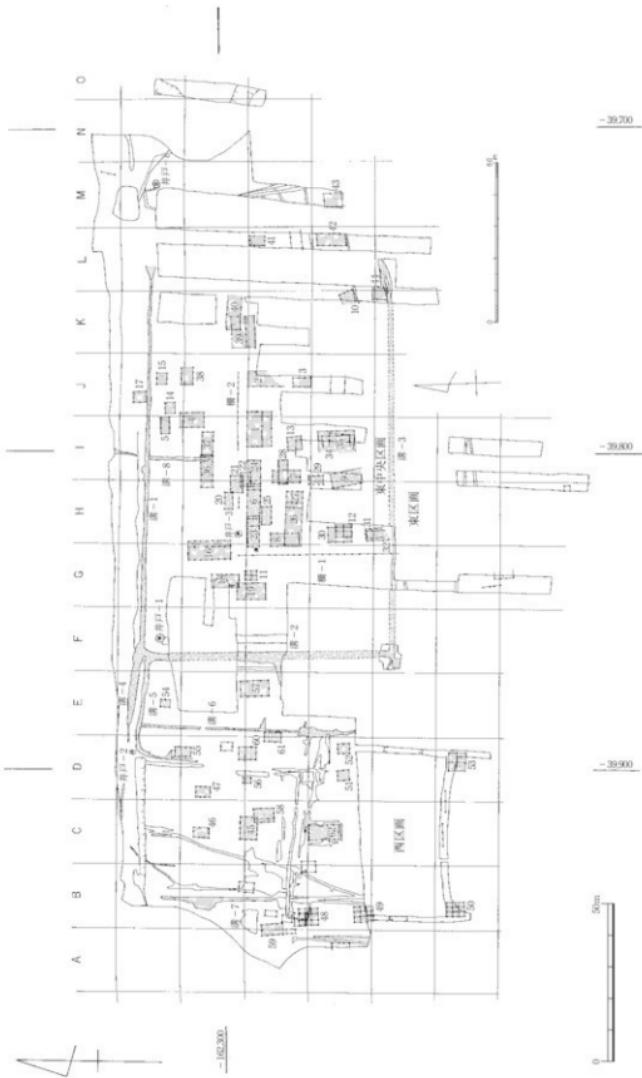
本書では、1973・74年度調査について報告されている以上の文献と、当時に作成された図面や写真等の記録とを総合して、この時の発掘調査について改めて報告していきたい。

1. 調査の方法

調査は、まず高等学校建設用地の範囲に10mおきに幅5mの南北トレーンチを設定し、遺構が確認されればその部分を拡張してトレーンチを連結するという方法がとられた。最終的に14,000m以上上の調査面積となった。当時としてはこれほどの大規模な発掘調査は珍しく、かなりの試行錯誤を重ねながらの調査となった。

また発掘調査の結果によって学校建設を再協議するという趣旨から、精査して発見された遺構は掘削せず、遺構の稀疎な部分に校舎等を配置することによって他の濃密な遺構群を守り、全体として遺跡を保護するという考え方で調査が進められた。そして校舎等部分も遺跡を保護しながら建設することとされたので、各遺構はほとんど掘削されないまま調査を終了することとなった。従って各遺構の出土遺物の有無や切り合い関係、あるいは深さ等の規模の確認等々はなされていない。その故に遺跡の発掘調査成果としては、現在の目から見ると隔靴搔痒の感を禁じえない。

第8図 平尾遺跡 遺構図（「古代を考える2」添付図に加筆。網目は説明のある遺構）



2. 検出遺構

遺構番号

当時の調査記録では、柱穴などの各遺構には遺構掘削されなかつたためか、番号が振られていない。文献①では、建物跡等の遺構は調査区の割り付けの縦数字と横アルファベットを組み合わせて指称している。

本書では文献①に記録されている遺構である掘立柱建物、溝、柵、井戸に数字を割り振って一覧表を作成した。(第8図、表2~5)

東区画

文献①では、調査区の東半分、実測図ラインでいえばFラインより東側で溝-1・2・3の三本の溝によってコの字に囲まれた区画を想定している(6頁)。本書では「東区画」と呼んでおきたい。この区画の東辺は実測図Lラインの位置で東除川の河岸段丘崖縁辺に当たるので、ここが区画の東を画するところになると思われる。区画の規模は南北距離である溝-1・3間が78m、東西距離は溝-2から河岸段丘崖までが約140m、面積的には約1万1千m²となる。この区画内に文献①では42棟の掘立柱建物があったとされているが(4頁)、発掘調査時に作成された遺構実測図(第7図)および文献①の添付図(第8図)では44棟の建物が復元されている。

この区画内ではさらに柵-1・2によって区画される。柵-1はG-3~6の位置で、21本の掘立柱が47.5mの直線上に並んで検出したものである。方向は南北方向である。それぞれの柱の掘り方が径数十cm~1mの規模とかなり大きなもので、文献①では「立派な柱」と表現しているので(4頁)、相当しっかりした構造の柵であることが想像できる。柵-2はH-3の位置で3本、H・J-3の位置で13本の掘立柱が直線上に並ぶものである。方向は東西方向である。前者を柵-2(西)、後者を柵-2(東)と名付けると、両者は15mの間を置いて一直線上に並び、合わせると総検出長42mを測る。柵-2の柱の掘り方は小さく、文献①では「柱の部分だけを掘って埋めたような簡単なもの」として柵-1との違いを記述している(4頁)。柵-1・2および溝-1・3で囲まれた区画(南北45m、東西90m)には掘立柱建物群がかなりの密度で配置され、文献①では「この一画が……全体の建物群のなかで中心的な性格をもった」と評価している(4頁)。本書では「東中央区画」と名付けておく。

東区画の掘立柱建物群

東区画内でも中心的な性格を有すると考えられる東中央区画においては建て替えが頻繁に行われたようで、建物が密集し、あるいは重なり合う。そのなかで組み合せとなるものを考えてみたい。I~J-4に所在する建物1が南面庇付大型掘立柱建物で、東中央区画のなかでも最も中心的な建物であると考えられる。この建物の東には建物2・3が南北に並び、西には建物6・7・8がコの字型に配置される状況を見ることができる。これによって建物1を母屋、建物-2・3・6・7・8をその付属建物とすることは可能と思われる。

表2 掘立柱建物一覧表（文献①の記述による）

番号	所在地地区	形状	規模 (底辺の規模)	面積 (底辺含む)	方向の傾き	記述箇所	記述の概要
1	I～J～4	3×5間南面庇	4.5×10.8m (7.8×10.8m)	84.24m ²	座標軸	①4頁の30行	1～5の建物5棟で1セット
2	J～4	2×5間以上	4.5×11.0m以上	49.5m ² 以上	座標軸	①5頁の2行	
3	J～4	2×3間	2.8×5.5m	15.4m ²	座標軸	①5頁の4～5行	
4	I～J～2～3	3×4間	4.5×7.4m	33.3m ²	座標軸	①5頁の7～8行	柱穴掘方0.7m
5	I～2	1×3間	2.5×5.0m	12.5m ²	座標軸	①5頁の10～11行	
6	H～4	2×7間	4.0×8.3m	52.0m ²	座標軸	①5頁の17行	
7	H～I～4	2×4間	3.8×8.8m	33.44m ²	座標軸	①5頁の18行	
8	G～H～4	2×4間	4.0×8.8m	35.2m ²	座標軸	①5頁の18行	
9	H～I～5	2×5間以上	4.8×8.8m以上	42.24m ²	N-12°～W	①8頁の3行	9・10の建物は古い時期
10	K～5	3×2間以上	4.8×3.8m以上	18.24m ² 以上	N-27°～W	①8頁の4行	
11	G～3～4	2×2間總柱	2.8×3.5m	9.8m ²	座標軸	①26頁の6～7行	11～15は倉の可能性が強い
12	H～5	2×2間總柱	4.0×5.0m	12.0m ²	座標軸	①26頁の7行	
13	I～4	3×3間	4.2×4.2m	17.64m ²	N-5°～W	①26頁の7行	
14	J～2	1×2間	3.0×3.5m	10.5m ²	座標軸	①26頁の7行	
15	J～2	1×2間	3.0×3.2m	9.6m ²	座標軸	①26頁の7行	
16	G～H～3	2×7間東面庇	4.0×13.0m (5.8×13.0m)	75.4m ²	N-2°～W	①30頁の4～27行	16はより少し古い
17	J～2	2×2間	3.5×4.0m	14.0m ²	N-2°～W	①31頁の1行	16と17は方向が近い
18	G～3	2×4間	4.0×8.4m	33.6m ²	座標軸		
19	G～3～4	2×4間	5.0×8.8m	44.0m ²	座標軸		
20	H～3	2×3間	2.6×5.2m	13.52m ²	座標軸		
21	H～I～3	1×3間	4.0×5.2m	20.8m ²	座標軸		
22	H～I～3～4	1×3間	3.0×4.5m	13.5m ²	座標軸		
23	G～3～4	2×5間	3.8×9.4m	35.72m ²	座標軸		
24	H～I～4	2×5間	3.8×9.4m	35.72m ²	座標軸		
25	H～4	2×3間	3.0×6.6m	19.8m ²	座標軸		
26	H～4	2×5間	4.5×12.0m	54.0m ²	N-1°～E		
27	H～4	2×3間	3.8×5.0m	19.0m ²	N-1°～E		
28	H～I～4	2×4間	2.8×7.6m	21.28m ²	座標軸		
29	H～I～4～5	2×3間	3.0×4.5m	13.5m ²	座標軸	①4頁の5～6行	
30	H～5	2×3間	5.0×7.2m	36.0m ²	座標軸		
31	H～5～6	2×2間以上	3.0×3.5m以上	10.5m ²	N-5°～W		
32	H～5～6	2×2間以上	3.0×3.2m以上	9.6m ²	N-3°～W		
33	I～5	4×1間以上	11.0×2.2m以上	24.2m ²	N-4°～W		
34	I～5	4×1間以上	8.5×2.0m以上	17.0m ²	N-5°～W		
35	I～5	4×1間以上	7.8×2.0m以上	15.6m ²	座標軸		
36	H～I～3	2×5間	3.8×9.8m	37.24m ²	座標軸		
37	I～3	2×5間	3.8×7.8m	29.64m ²	座標軸		
38	J～2～3	1×3間	3.6×5.5m	19.8m ²	座標軸		
39	K～3～4	2×5間南面庇	4.5×10.0m (7.2×10.0m)	72.0m ²	N-2°～W		
40	K～3	3×4間以上	4.2×9.6m以上	40.32m ²	座標軸		
41	L～4	2×2間	2.8×4.5m	12.6m ²	座標軸		
42	L～5	2×5間	3.6×9.2m	33.12m ²	座標軸		
43	M～5	2×3間以上	4.2×5.5m以上	23.1m ²	N-3°～W		
44	K～L～5～6	1×3間	3.8×4.8m	18.24m ²	座標軸		
45	C～3～4	3×4間	5.0×1.2m	36.0m ²	N-3°～E	①8頁の13行	45～47の建物3棟で1セット
46	C～3	2×3間	3.0×4.8m	14.4m ²	N-3°～E	①8頁の15行	
47	D～3	2×3間	3.0×4.5m	13.5m ²	座標軸	①8頁の15行	
48	B～4～5	3×3間總柱	5.2×6.0m	31.2m ²	N-3°～W	①26頁の5～6行	調査区西半部に48～53の6棟の倉が並ぶ
49	B～5	3×3間總柱	5.0×6.0m	30.0m ²	N-3°～W	①26頁の5～6行	
50	B～7	3×3間總柱	4.4×5.5m	24.2m ²	N-3°～W	①26頁の5～6行	
51	D～5	2×2間	3.0×4.0m	12.0m ²	N-5°～W	①26頁の5～6行	
52	D～5	2×2間	3.0×3.5m	10.5m ²	N-4°～W	①26頁の5～6行	
53	D～7	2×2間	5.0×5.4m	27.0m ²	座標軸	①26頁の5～6行	
54	E～2	1×2間	2.2×2.8m	6.16m ²	N-4°～E	①29頁の17行	54～56、45の建物4棟は軸が同じ
55	D～2～3	2×3間	3.0×4.8m	14.4m ²	N-3°～E	①29頁の17行	
56	D～3～4	2×2間	1.8×2.8m	5.04m ²	N-3°～E	①29頁の18行	
57	E～3～4	2×4間	4.8×8.8m	42.4m ²	N-3°～W	①29頁の18行	57～59の建物3棟は軸が同じ
58	C～4	2×3間西庇	3.0×6.2m	18.6m ²	N-2°～W	①29頁の19行	
59	A～B～4	2×4間	3.4×6.5m	22.1m ²	N-3°～W	①29頁の19行	
60	D～3～4	2×3間	4.0×5.0m	20.0m ²	座標軸		
61	D～E～4	2×3間	3.0×5.0m	15.0m ²	N-4°～E	①4頁の7行	「A～Fの部分に18棟」とあり実測図では(45～62),なお①の添付図では24棟
62	C～5	2×5間	4.5×9.5m	42.75m ²	座標軸		

以上が東中央区画で組み合わせとして考えることができるものの、他にも多くの建物が密集するが、これらは同一時期ではない。H-I-3~4に所在する建物6・22・24、およびI-5に所在する建物33・34・35は互いに重なり合っており、建物群が三時期以上にわたることを示す。東中央区画の密集した建物群は、長年にわたって建て替えが繰り返されたものと思われる。

東区画ではG~H-3に所在する建物16が東面庇付大型掘立柱建物で、規模は建物1に次ぐ大きさであり、当遺跡内でも中心的役割を有する建物であろうことは推定できる。東中央区画からは外れるが、文献①では溝-6・8がこの建物を区画する溝ではないかとしている(30頁)。しかし、この建物を母屋とした場合に組み合う建物はなさそうである。

K-3~4に所在する建物39は建物1と同様の南面庇付大型掘立柱建物であり、これも当遺跡内で中心的な建物であろうと思われる。しかし建物1・16のように、溝や柵で区画されている様相ではなく、またこれを母屋とした場合に組み合う建物はなさそうである。

東区画内で、倉庫と考えられる建物はG-3~4に所在する建物11とH-5に所在する建物12で、ともに2間×2間の縦柱である。建物11は東中央区画より外にあるが、建物12は同区画内にある。文献①では、他にI-4に所在する建物13とJ-2に所在する建物-14・15も倉庫とするが(26頁)、その根拠は明らかでない。

西区画

文献①では、調査区の西半分、実測図ラインではFライン、遺構では溝-2より西侧でも一つの区画を想定している(4頁)。本書では「西区画」と呼ぶことにする。

西区画は、東は上述したように溝-2、北は溝-4・5によって区画されるが、西および南については判断としない。文献①によれば、溝-4・5は溝-1・2が後になって延長されたものであること、東区画のうちG~H-4~5からは古い土器が出土したが、西区画では新しい時期のものしか出ないこと、東区画の建物の重複があって3~4時期の建て替えがあるのに対して西区画では1回程度の建て替えしかないこと、東区画には北に対して西に振る建物があり、これは古い時期のものとされていること、以上を根拠に当遺跡ではまず最初に東区画が成立し、その後西区画に拡張されたとしている(7~8頁)。

西区画の掘立柱建物

西区画内に文献①では18棟の掘立柱建物があったとされているが(4頁)、同文献の添付図では26棟の建物が復元されている。なお発掘調査時に作成された遺構実測図では18棟の建物である。想像するには、平尾遺跡の討論段階では遺構実測図が使用され、その後討論内容が文章化されて出版される段階になって新たに追加してまとめたものを添付図としたのではなかろうか。

西区画で検出された掘立柱建物群は、東区画のような集中ではなく、散在している様相を呈している。このうち面積的に大きなものはC-3~4に所在する建物45とC-5に所在する建物62を挙げることができる。文献①では建物45を西区画の中心的建物とし、さらに建物-46・47を含

めて3棟がセットになるとする(8頁)。一方の建物62の方には言及されていない。

西区画で注目すべき建物は、48~49の倉庫群であろう。Bラインに沿って3間×3間の総柱建物3棟が、等間隔ではないが南北の直線上に並んでいるのである。この倉庫群は、当遺跡を考える上において重要な位置を占めるものと思われる。なお文献①では他に建物51~53も倉庫としている(26頁)。

井戸

検出された井戸は、文献①では6基が記述されているが(28頁)、添付図ではそれ以外にG-4とM-2に④マークの遺構があるので、計8基である。このうち完掘した井戸は、井戸-1・2の2基である。どちらも素掘りで、土器片がわずかに出土しており、井戸-2の方では黒漆椀

表3 溝一覧表(文献①の記述による)

番号	所在地区	検出長	幅	方向	記述箇所	記述の概要
溝-1	F～L-2	128m	0.5～1.0m	E-1°～N	①6頁の21～22行	溝1～3はつながり、規格をもつて四角く囲む。
溝-2	F-2～6	78m	2.0～4.0m	N-1°～W	①6頁の23行	
溝-3	F～L-6	123m	1.2～1.5m	E-1°～N	①6頁の25行	
溝-4	E～F-2	22m	2.0～3.0m	W-5°～N	①7頁の9行	溝1・2がのちに溝4・5に延長される。
溝-5	D～F-2	29m +18m	1.0～1.2m 0.6～0.8m	W-5°～N S-6°～W	①7頁の9行	
溝-6	E-2～4	45m	0.5～0.8m	N-2°～E	①9頁の18行	溝6と7の間隔は半町(54m)。
溝-7	B-2～5	43m	1.0～1.2m	座標軸南北	①9頁の19行	
溝-8	I-1～3	20m	0.8～1.0m	N-1°～E	①30頁の17行	溝8・6あるいは溝8・2に区画される中の母屋が建物16

表4 横一覧表(文献①の記述による)

番号	所在地区	検出長	検出本数	方向	記述箇所	記述の概要
横-1	G-3～6	47.5m	21本	N-1°～W	①4頁の17～18行 ③32頁の29行	横1の掘方は数十cm～1m。柱間は8尺を基準。
横-2(西)	H-3	3.6m	3本		①4頁の20行 ③32頁の28行	横2の掘方は小さく、間隔もまちまち。横1・2は同時期。
横-2(東)	I～J-3	22.4m	13本			

表5 井戸一覧表(文献①の記述による)

番号	所在地区	規模	記述箇所	記述の概要
井戸-1	F-2	径2.5m	①28頁の8行	素掘り。少量の土器片出土。
井戸-2	D-2	径1.2m	①28頁の9行	素掘り。黒漆椀出土。
井戸-3	H-3	径2.0m	①28頁の12行	
井戸-4	C-4			
井戸-5	A～B-5		①28頁の10行	井戸の可能性。後世のものも含む。
井戸-6	D-4～5			
井戸-7	G-4	径1.2m	①添付図に④マーク	
井戸-8	M-2	径2.5m		

が発見された。時期は不明と言わざるを得ないが、掘立柱建物群よりはかなり時期が新しいと思われる。

井戸ー3は掘り方のみ掘削して、井戸であることの確認で終わっている。また井戸ー4～6は、文章の記述はあるが、具体的にどの遺構であるかは不明である。これらは時期も不明で、かなり後世のものも含まれているようである。

井戸ー7・8は、上述したように添付図に⑩マークがあるものである。

結局、掘立柱建物群に伴うと考えられる井戸は、確実なものはないと言わざるを得ない。

3. 出土遺物

出土遺物の再整理

平尾遺跡では2002・03年度に、美原高等学校の南に位置でバイパス道路建設に伴う発掘調査が実施された。この調査の整理作業を行なうに当たって、73・74年度の美原高等学校における発掘調査を知る必要があったため、その出土遺物の実測作業を行ない、文献④のなかでその成果を公表した。その結果、73・74年度の発掘調査における出土遺物は、7世紀中ごろから8世紀前半までの100年足らずの間の時期に限定できることが判明した。また銀の溶解に使用されたトリベが見つかり、当所がかなり早い時期から鋳造工人の活躍する所であったことも判明した。あるいは数は少ないが古代瓦の細片があり、一部に瓦葺建物があったことを確認できるものであった。

文献③の出土遺物に関する記述

文献③は上述したように当時の学校側が得た情報に基づくものと思われる。その中で、出土遺物について次のような記述がある。

「地下50cmのところから、7世紀中期より8世紀初めの須恵器、土師器の破片、二上山から運んできたと思われる凝灰岩の切り石…30cm四方…4枚、さらに鎌倉時代の瓦のかけら3個等、計1,000点もの遺物が発見された。」(1頁)

ここでは遺物の時期を「7世紀中期より8世紀初め」としている。これは文献④で検証されたものと近似しており、かなり正確な編年観に基づく資料があったのではないかと思われる。

ところで遺物量が「1,000点」とあるが、実際にはこの時の調査で出土した遺物として現在保管されているのはコンテナ100箱程度である。また凝灰岩の切り石や鎌倉時代の瓦についても他の文献には出てこないので、念のためにここに記しておく。

第4章　まとめ

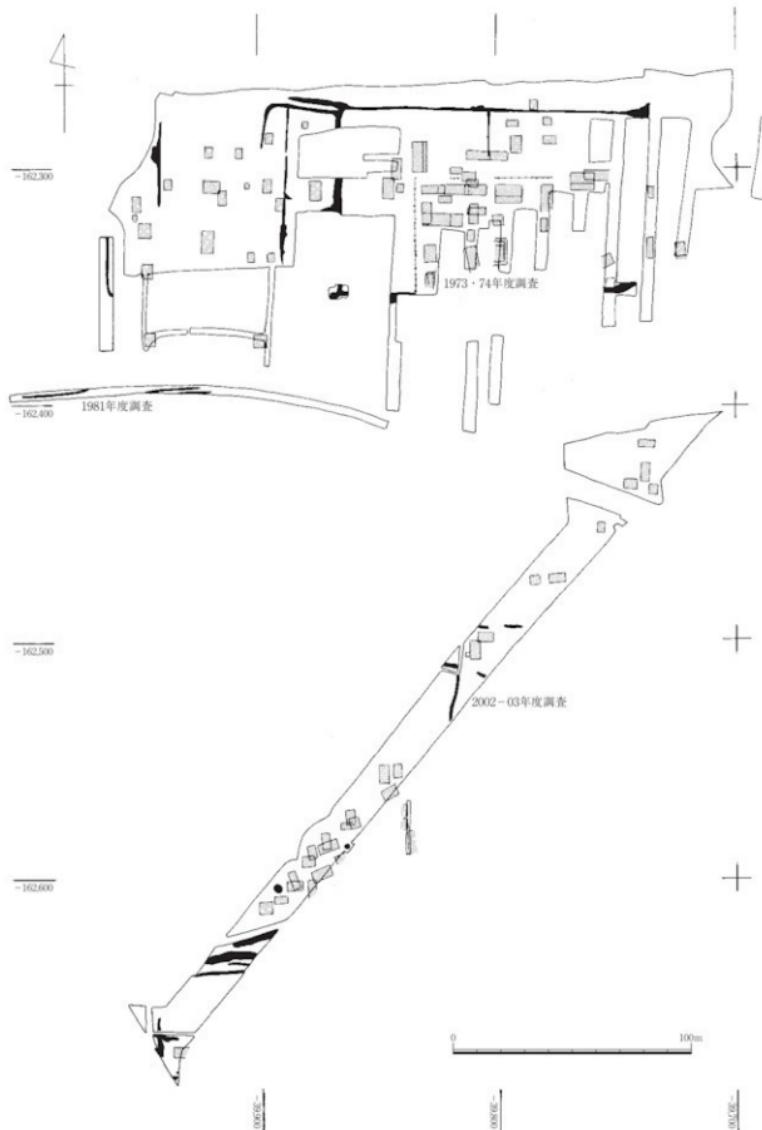
平尾遺跡ではこれまでに2万m²を超える発掘調査が実施された。その結果、この遺跡は飛鳥時代末から奈良時代前期にかけての時期で、450m四方の範囲に100棟もの掘立柱建物群が広がる大規模な遺跡であることが判明した。その中には溝と柵に取り囲まれた区画に建物群が整然と並ぶ様相を示し、また出土遺物にしても瓦や硯、丸鞘などは発見されており、この遺跡が一般的な集落ではなく、かなり高位の階層に属するものであることは間違いないところである。

今回の調査は高校の下水管切替工事に伴うものであり、しかも工事の掘削が遺構面まで到達しない部分が多くいたため、実際の発掘調査としては対象面積が狭小とならざるを得なかった。調査結果は本書にあるとおり、須恵器片がわずかに出土したのみで、古代の遺構は検出されなかつた。しかしかつての調査区跡が発見されたことによって、当時検出された建物群等の遺構の位置がより正確に把握することができ、平尾遺跡の解明に向けて大きく前進することができた。

平尾遺跡の性格について、これまで官衙跡か豪族の邸宅跡かの論争があったことは前述した。この論争には、直木幸次郎、藤沢一夫、吉田晶、山尾幸久、小笠原好彦等の各氏が参与しており、それ以外にも平尾遺跡発掘調査担当者が意見を呈してきた。

平尾遺跡のこれまでの発掘調査は全体から見るとまだ僅かな面積に過ぎないが、将来はこの遺跡のさらなる発掘調査が進んでいくものと思われる。その際に論争に決着をつけるような資料が発見される可能性は十分に考えられる。

本書はこういった議論に参加するにはいまだ遠いが、平尾遺跡の解明に一助となるものと確信する。



第9図 平尾遺跡遺構配置図（網目は掘立柱建物、黒塗りは溝と井戸）

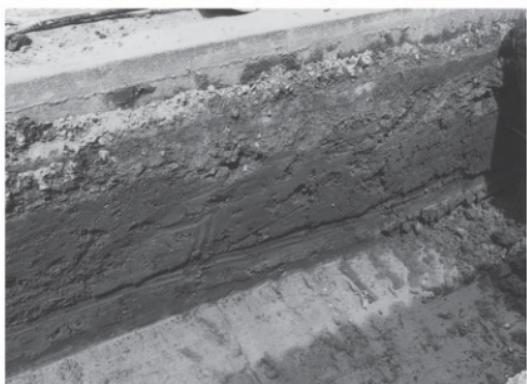
図 版



1. P～最終2間の調査(北から)



2. 会所Oの調査(東から)



3. N～O間の調査(南東から)
地山面にキャタピラ痕が見える



4. 会所Aの調査（北東から）



5. 最終2の調査（南東から）



6. 最終2～L間の調査
(南西から)



7. 東区画東半部（南西から）



8. 東区画中央部（南から）



9. 東区画西半部（北東から）



10. 東中央区画 (西から)
中央左寄りに建物23・6・24



11. 東区画西半部 (南から)
中央に柵-1



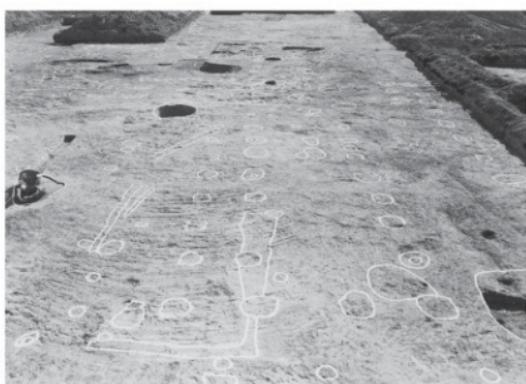
23. 東区画中央～西部 (東から)
中央手前に建物1



13. 建物1・その上に建物4
(南から)



14. 建物11(左下)・建物16(中央上)・建物23(右下)
(南から)



15. 建物16・その上に建物23と櫛
-1
(北から)



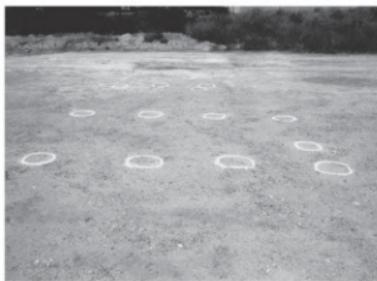
16. 建物39および調査区から東除川を望む（西から）



17. 溝-1の状況・手前は溝4・5（西から）



18. 柵-1と建物12・30~32（北西から）



19. 建物35・その上は建物15（南から）



20. 調査区東端の段丘斜面の様相（北東から）



21. 西区画東半部（南西から）



22. 西区画中央部（南から）



21. 西区画西半部（南東から）



24. 西区画西南西部 (南東から)



25. 西区画南部中央 (南から)



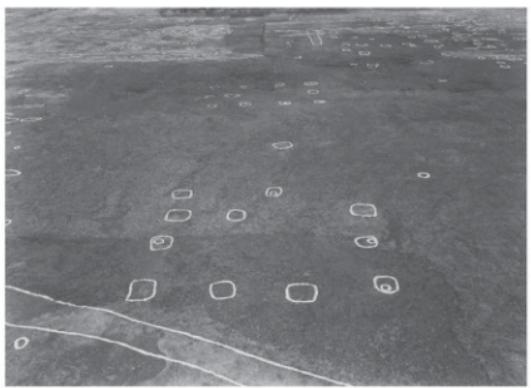
26. 建物48・上方に建物49

(北から)

27. 建物45・上方に建物46
(南から)



28. 建物46・上方に建物47
(西から)



29. 調査区から黒姫山古墳(左上の森)を望む
(南東から)



報 告 書 抄 錄

ふりがな	ひらおいせき						
書名	平尾遺跡						
副書名	—府立美原高等学校下水道放流切替工事に伴う調査—						
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	2011-4						
編著者名	辻本 武						
編集機関	大阪府教育委員会						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL06-6941-0351（代表）						
発行年月日	2012年3月30日						

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	面積(m ²)	調査原因		
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	***	***	***	***		
平尾遺跡	大阪府堺市 美原区平尾		27147	450	34° 31° 59°	135° 34° 09°	20110711～ 20111014	150m ²	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平尾遺跡	集落跡	飛鳥時代末～ 奈良時代前期		須恵器	
要 約	古代の遺構面を確認し、須恵器の出土をみた。また1973・74年度の調査で検出された掘立柱建物群等の遺構群の正確な位置を知ることができ、平尾遺跡を再検討する材料を得た。				

大阪府埋蔵文化財調査報告2011-4

平尾遺跡

—府立美原高等学校下水道放流切替工事に伴う調査—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成24年3月30日

印刷 株近畿印刷センター

〒582-0001 柏原市本郷5丁目6番25号